

城下町の商家の年中行事

— 青森県弘前市石場家調査報告 —

小山隆秀¹⁾ 増田公寧²⁾

A report on annual events of a store in a castle town
-House ISHIBAKE, Hirosaki city, Aomori pref., northern Japan-

Takahide OYAMA, Kimiyasu MASUTA

Key words: 年中行事、節供、商家、蛇の兜

1. 石場家について

石場家（青森県弘前市亀甲町：写真1）は、江戸時代から菓製品を扱い、弘前藩の御用商人をつとめた旧家である。母屋は18世紀前半の建築で、昭和48年2月には国の重要文化財に指定されている。現在の当主は、第18代・石場清勝氏である。本稿では、現在、石場家でおこなわれている伝統的な年中行事について紹介したい。なお、特に断り書きがない場合、すべての行事は新暦で表記する。

2. 石場家の年中行事

(1) 正月

石場家では、家族そろって年越しの膳を囲みながら大晦日の夜を迎える。年越しの膳は、石場家に代々伝えられてきた伝統の料理で、石場清勝氏の妻・敏子氏が調理と配膳を担当する。

調理は台所の囲炉裏でおこなう。「けの汁」の材料には、わらびとゼンマイの乾物を用いる関係上、水戻しには時間がかかるため、12月25日から下ごしらえを始める。わらびとゼンマイのほか、大根、にんじん、油揚げ、ごぼう、ふき少々（七草の数あわせのために用いる）、焼いた昆布を用い、これらの材料を細かく切って作る。「焼き魚」も台所の囲炉裏で焼き、鮭の「かま」は一家の当主のものとして決められている。台所の囲炉裏には、昆布と焼干しで出汁をとった汁物の鍋をかける。料理ができあがると、大皿や「おひら」（蓋付きの大きな丸い塗り物）に盛られ、津軽塗りの膳とともに並べられる。座敷の囲炉裏端には、屏風が飾られ、その前に屠蘇器と重箱が置かれる。重箱の中には勝ち栗、結びこんぶ、結びするめ、干しエビなどが詰められている。座敷の囲炉裏を囲みながら、冷えた煮物には囲炉裏にかけた出汁を掛けてあたためながら食べる。

餅つきは、12月28日におこなう。27日におこなうこともまれにあったが、29日には「苦がつく」といっておこなわない。現在は餅米2升を用いる。昔は3升炊いていた。供える場所は、神棚、床の間、仏壇、店（ゑびすさま）、便所、火の神、水の神などである。多いときには30カ所以上分のお供えを用意した。神棚には7組の鏡餅をそなえる。7組供えるのは、神棚に祀られている神（神明さま、金比羅さま、大黒さまなど）が複数あるためである。床の間には「ご先祖様の掛け軸」（初代夫婦の像。通称「ご先祖様」写真2）を飾り、1臼分の餅を上下2段にした大きな鏡餅をそなえる。鏡餅の上には、だいたい、干し柿、栗をのせ、松の帆柱を立てた昆布の船を飾る。中くらいの大きさの鏡餅は3組つくり、仏壇、ゑびすさまなどに供える。小さい鏡餅は20組ほどつくり、その他もろもろの場所（便所、かまどなど）に供える。

元旦には、大晦日に鏡餅の隣に供えた「おひら」の料理を食べる。また、昆布でとった出汁に角餅、イクラ、大根、人参、菜っ葉を入れた雑煮も食べる。金比羅様を祀る石場家では、芹を用いないことがしきりであるという。

七日正月（1月7日）には、「けの汁」を食べる。

1) 青森県立郷土館 学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

2) 青森県立郷土館 研究員（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

(2) 上巳 (旧 3月 3日)

「ご先祖様」の前とひな壇の前にお膳を2組ずつ供える。あさつきを用いた料理を用意する。縁起物である「蛇の兜」(後述)を出して飾る。節供の祝いごとは、すべて旧暦でおこなっている。

(3) 端午 (旧 5月 5日)

上巳と同様に、「ご先祖様」にお膳を供え、「蛇の兜」(へびのかぶと)を出して飾る。端午にはタケノコ料理、重陽にはきのこ、栗、菊を用いた料理を作る。

(4) 七夕 (旧 7月 7日)

五節供のうち、七夕だけは行わない。石場敏子氏によると「お盆が近いからではないか」とのことである。

(5) 盆

8月13日に墓参りに行く。その後、店を閉めた午後7時頃から迎え火を焚く。火は毎日焚き、20日の送り火までおこなう。天候の悪い日は焚かない。たきぎは買うこともあるし、家にある薪を小さく割って使うこともある。場所は店の入り口の前でおこなう。道路のアスファルトが熱で変色しないように、壊れたコンロの五徳を敷いて焚いている。椀の木にマッチで火を付け、それをたきぎに移す。

料理は、仏壇、タナコ、「ほっけおり」(法界折)3つの計5食を用意し、内容はすべて共通である。ただし、法界折1つについては、鏡天をゼリーで代用する。理由は、スーパーで販売されている鏡天が1パックに4個しか入っていないため、2パック購入すると3個が無駄になるからである。

現在では、若い人達にあわせて、人出の少ない午前中に墓参りを済ませている。墓参りでは、「ほっけおり」に、いろいろな野菜(種類はこだわらない)を調理して詰める。13日に檀那寺である海蔵寺(曹洞宗)に墓参りにいき、10基以上ある墓碑の前に3つの折を供える。「ほっけおり」を3つ供えるのは、供物台が3つあるからで、墓碑の数とは関係がない。先代のおばあさん(石場キミ氏)の時代には、13日と16日に墓参りに行った。午前中に数多くの「ほっけおり」を作り、午後から出かけ、親戚や知人、同級生の家の墓を含め、20カ所以上を廻った。コースは禅林街(西茂森町)から新寺町へ、そして最勝院のあたりで終了した。その頃には辺りが真っ暗になっていた。すべての墓に「ほっけおり」を作り、皆で分担して運んだ。数年前まで、家の墓前に「ほっけおり」を供える際は、折の下に蓮の葉を敷いたが、去年頃からは用いなくなった。理由は、持ち帰らなければならないゴミが増えること、蓮の葉が手に入りにくくなったこと、昔は子供や親戚大勢で出かけたため荷物の持ち手があったが、今は少人数で参拝するため、極力荷物の量を減らしたいということからである。弘前城のお堀の蓮の葉や植物の葉を用いたというような話は知らない。また、大根を刻んで細かくしたものを墓前に撒くこともおこなった。これは米が貴重であるため、その代わりとして撒いたのであるが、近年はおこなわなくなった。散らかすと寺院に迷惑がかかるからである。

仏壇にはお膳を供え、きゅうりやなすで作る牛馬は飾らない。盆花は花屋から購入している。水は仏用の茶碗に入れて供える。これは日常と同様である。お膳には、生野菜、茗荷の酢漬け、鏡天、果物を並べる(写真3)。お盆には「ご先祖様」の掛け軸を出さない。「ご先祖様」は、節供の行事のときにのみ飾ることになっている。

また、「無縁さま」のために竹製の精霊棚をこしらえ、家の北側の軒下の、手の届く場所に設置する(写真4)(写真5)。この精霊棚に正式な名称はなく、「タナコ」あるいは「盆だな」といつている。棚は先代のおばあさん(故石場キミ氏)が作ったもので、お盆以外は蔵の中に収蔵し、毎年同じものを用いている。家の仏様のもを無縁仏たちに先に食べられてしまうと困るので、無縁仏のためにしつらえるのである。きゅうりとなすで作った牛馬を飾り、仏壇に供えた料理の内容と同じものを蓮の葉の上ののせて供える。前は家の縁側の外の曲がり角に飾っていたのだが、今はすこしずらした場所においてある。8月13日かその翌日くらいまで飾っておく。

昔は丸い灯籠を、仏壇と棚に1つずつ下げていたが、現在は市販の澱粉製のとうろうを笹竹に吊している。海蔵寺の先々代の和尚様は、先に「タナコ」で読経してから、家の仏壇を拝んでくれていた。寺に御札をしに参ることも兼ねて、先代のおばあさん(石場キミ氏)は16日にも墓参りに行っていた。20日には送り火を焚く。

(6) 重陽 (旧 9月 9日)

仏壇の左隣に「ご先祖様」の掛け軸を掛ける。その前にテーブルを設置し、お茶を2つ、その間に「蛇の兜」を置く。「蛇の兜」は、箱の口をずらし、開けておく。その手前に、お膳を並べる(写真6)。お膳の両脇には菊の花を1本ずつ供える。菊は庭から採ってきたものを用いている。午前中に料理の支度を済ませる。同じ内容のお膳を4つ用意し、仏壇の隣に設けたテーブルに2つ、床の間の掛け軸の前に2つを供える。栗ご飯ときのこ汁を用意する。例年ならばきのこ汁にはサモダン(ナラタケ)を用いるのだが、今年是不作なので、しめじなどいろいろなキノコを用いた。とくにこだわりはない。水物を2つ(まつぶの水物とミズ、きのこの佃煮に菊を添えたもの)用意する。焼き魚は、祝い事の意味をこめて赤い魚(今年はキンキン)を用いた。焼き魚の背後には紅白の蒲鉾、刺身、酒、醤油を並べる。今年は暑いので、早めにおろし、冷蔵庫に入れることにした。床の間の掛け軸は、日常のものと同じで、特に変えることはしない。単に、先代がやっていたのと同じように、ご先祖にお供えて召し上がっていただくという気持で行

っているだけであり、とくに他の意味や願いはない。また、前夜におこなう行事もない。

(7) 十五夜（9月15日）

ススキを立て、団子、とうもろこし、果物、枝豆、酒を供える。

3. 石場家の屋敷神

屋内の神棚には、4つの小祠がある。左から、金比羅さま、大黒さま、神明さま、稲荷さまである。石場清勝氏によると、「以前は西側の居間の一角にあったものらしく、ある時期（例えば近代の神仏分離令のとき）に現在地に移動したのではないか、その証拠に、小祠がかなり煤けている」とのことである。現在は、奥の間に、南向きで祀られている。以前はこの部屋の東側の引き戸の上部に「おふだ入れ」があり、古い札はすべてここに納めていた。（図1参照）

(1) 金比羅さま(写真7)

左端に祀られている。木のお守り札が2つ、いずれも当主の祖父にあたる人（石場清七氏、昭和25年に64歳で死去）が若い時に参拝し、授与されたものといい、年号や個人名は記されていない。奥には金属製の御幣が二つ。その奥に御札入れがあるが、中は不明である。

(2) 大黒さま(写真8)

高さ20cmほどの木像で、全体が煤けている。前面下部に墨書で文字が記入されているようだが、わからない。大黒様の木像の前には1.5cmほどの小さな木像が接着剤で付けられており、恵比寿様のようにみえる。

(3) 神明さま(写真9)

天照皇大神の札が納められている。奥には鏡が置かれている。

(4) お稲荷さま(写真10)

お稲荷さまの祠には、毎月10日に供え物をする。7種類の野菜（何でも良い）、油揚げ、頭つきの魚、赤飯をささげる。神棚にもお稲荷さまを祀っているが、他の神よりも一段低い右端にまつている。小祠は空になっており、現在は屋敷地内の離れた場所の祠に祀っている。春の雪解けとともに外の祠に祀り、雪囲いが済んだあたりに家の中に戻して祀る。移動させる日は特に決まっておらず、およその感覚で移している。

(5) オシラサマ(写真11)

神棚の下に位置する。「土着の神なので、神棚とは別の低い場所にまつている」という。以前はイタコを呼んで祭祀したこともあったが、最近はおそばせていない。

(6) ぬびすさま(写真12)

店に安置されている極彩色の像である。釣り竿は新調されている。

4. その他の行事や縁起物について

(1) 百万遍

5～6年ほど前までは、石場家が中心になっておこなっていた。石塔はなく、近所の青森銀行あたりから若党町のS家近辺を曲がるコースで、辻々で数珠をまわし、鉦をたたいた。オオヤゲ（大宅）の前では、特別に鉦をたたいたりした。石場家の蔵には、数珠と鉦が収蔵されている。また、「念仏講」と称して、仲間が亡くなった場合、頼まれれば通夜に念仏をあげに行き、数珠まわしをおこなった。数珠1つ、鉦2つ、木魚1つ、ほかに幟（長さ3メートルほど）が3つ保管されている。仲間同志でおこなう相互扶助のための出納帳簿もある。

(2) 「蛇の兜（へびのかぶと）」

昔、カブトムシを食べた蛇が、頭の上にカブトムシの頭を載せて這っていたものを採集したと伝えられ、「蛇の兜」と称して家宝にしている。「蛇の兜」と墨書きされた小箱(写真13)に、カブトムシやクワガタムシの遺骸と思われるものが入られ(写真13)箱の裏には「寛政五癸丑年八月廿日大小／慶応元乙丑年六月三日夜口大一云々」と書かれている(写真14)。節供のたびに出して祀る。

(3) 魚の尾びれ

魚の卸業をやっていて、大きな魚が手に入ったときに切り取って、屋内の柱に貼っていた(写真15)。先代のおばあさん（石場キミ氏）によれば「のしのかわりに使った」とのことである。石場清勝氏によると、「大きな魚を食べたことを自慢するため」に同様のことをしているケースがあると聞いたことがあるという。

謝辞

本稿作成にあたり、実地調査に際しましては、石場家第18代当主・石場清勝氏、石場敏子氏に多大なるご協力をいただきました。末筆ながら深く御礼を申し上げます。



写真1



写真2

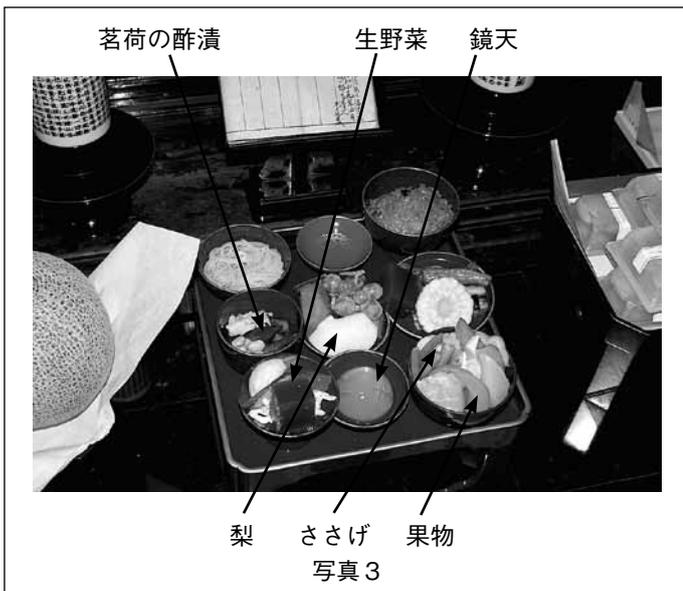


写真3

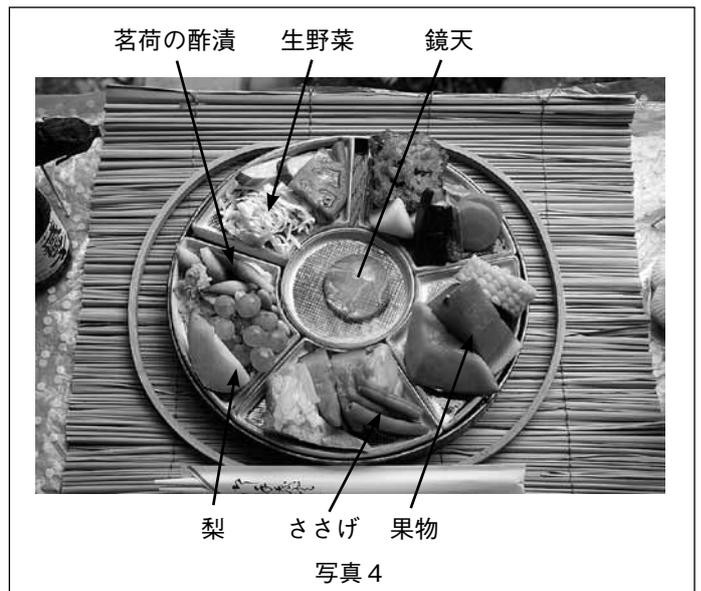


写真4



写真5

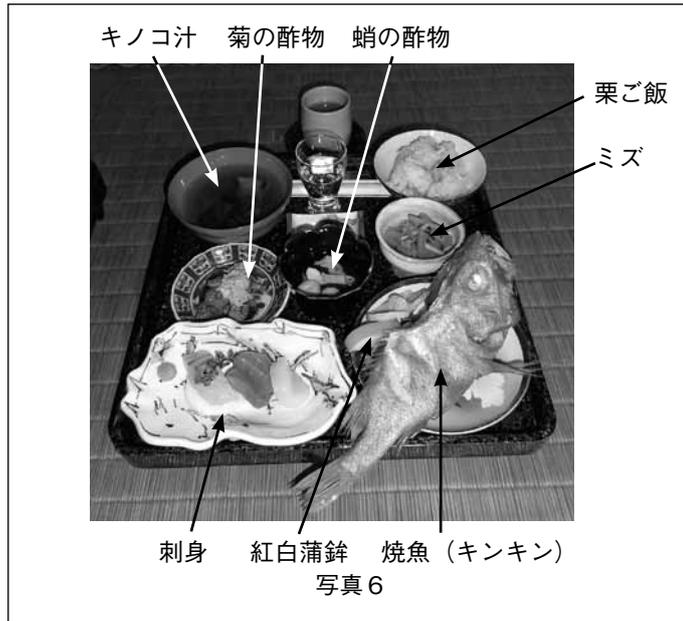


写真7



写真8

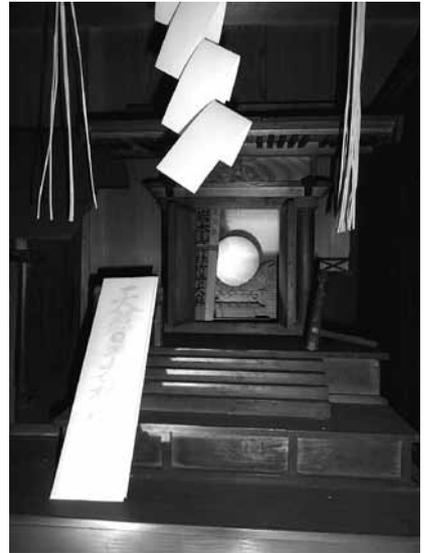


写真9



写真10



写真11



写真12



写真 13



写真 14



写真 15

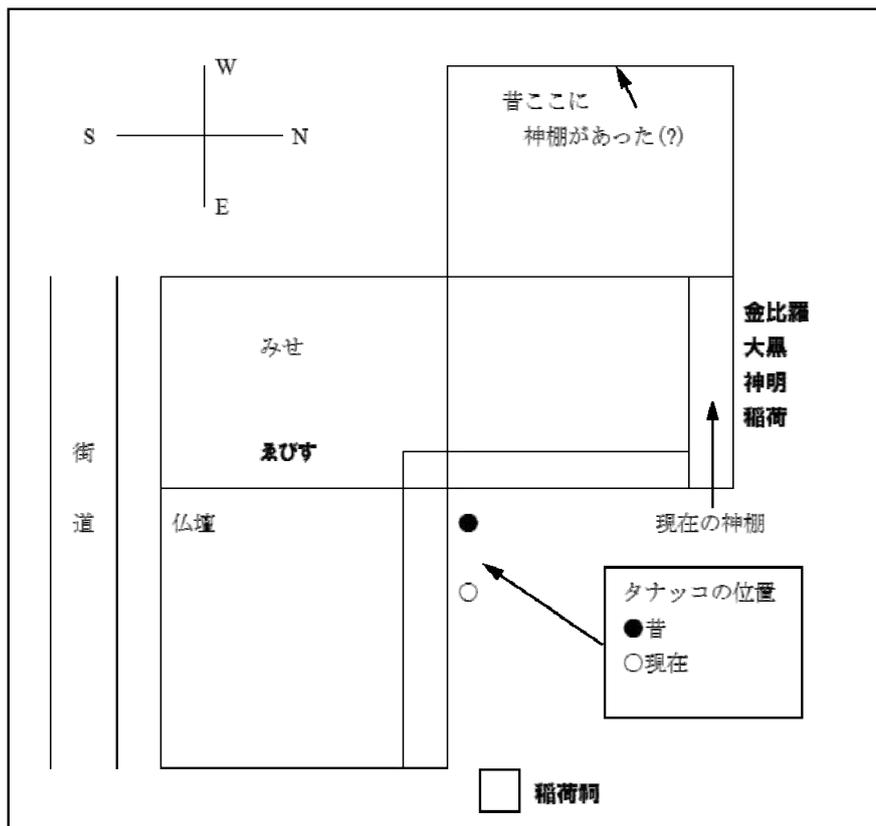


図 1 石場家間取り